

日本消化器外科学会雑誌編集後記

Stage IV 大腸癌で闘病中の大学の先輩から、『抗癌剤治療は受けたくない。副作用の少ない免疫療法を考えているが、君はどう思うか。』と意見を求められた。癌の疫学の分野では高名で、日頃から尊敬していた先輩であるが、大腸癌に対する免疫療法は小生のライフワークの一つでもあるため意見を述べ、免疫細胞療法やペプチドワクチン療法を推奨した。後者については週に一度、遠路はるばる当施設まで新幹線を利用して来院されたが、自身のポリシーに基づいての選択であったためか、むしろ通院を楽しんでおられる感さえした。

その先輩は俳句の道にも造詣が深く、『ゾンデ』という小句集を平成 22 年 12 月 1 日に刊行され、小生も一冊頂戴した。俳句をたしなむというような才能は全くないが、ゾンデというタイトルに興味をそそられて表紙を開けてみると、『ゾンデとは、食道や尿道など体内の管腔に入れて中を探索したり狭窄部を拡張する棒状の器具のことである。手探り状態の句をまとめた本句集にふさわしいのではないかと思い、句集名とした。』と記述されていた。医にかかわる用語を使った 99 の俳句を一集にしたものであるが、その中で印象に残ったのが『理想食摂りて病気になる初秋』という句であった。栄養のバランスや摂取カロリーが理想的であっても、それを摂取する人の食欲とマッチしなければ無意味であるという言外の意をこめたものであると解釈した。切除不能な進行大腸癌に対する“理想食”である FOLFOX を経験されたものの、消化器症状や骨髄抑制がかなり重篤で、『人間らしい生活ができなかった。』とつぶやいておられた状況下で、この句を詠まれたものと推察している。

原著論文や症例報告などの医学論文については言外の意を汲み取るのではなく、その研究や症例における新知見や稀少性、読者への教育的メッセージ、などを明確に記述する必要がある。文学的才能に長け、俳句のように限られた文字数の中に思いを込める能力を持つ消化器外科医は、医学論文においても説得力のある記述が可能と思われる。しかし、そうでなくても、厳しい査読をパスして採用された今回の掲載論文を、文章表現の工夫という観点から熟読して今後の論文執筆の参考にするのも面白いのではないかと思考している。

追記：奇しくもこの編集後記を執筆中に先輩の訃報が届きました。臨床消化器外科医のあるべき姿について患者の視点から御指導下さいました先輩のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(杉山 保幸)

2011 年 11 月 1 日